

Title	20世紀スペインの小説と「社会の危機」：F. アヤラ作品における文学と社会学の交錯
Sub Title	The 20th century Spanish novel and social crisis : intersection between literature and sociology in F. Ayala's works
Author	丸田, 千花子(Maruta, Chikako)
Publisher	
Publication year	2020
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2019.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究では、社会学者であり文学者であるフランシスコ・アヤラ (1906-2009) の文学と社会学が融合する場としての小説について研究した。20世紀スペイン社会が経験した社会の危機を、アヤラは社会学の著作と小説で一貫して問い続けた。そのアヤラの1940年代から1960年代の著作を分析・考察した。結果、アヤラは社会の変革や危機についての考察を新聞、文芸誌や著書などで発表するだけではなく、抽象的観念的になりがちな社会学的な論考を、小説において具体的な日常生活のエピソードや人物に置換した。その試みは社会の危機をより広く一般読者に知らせ、問題を提起し共有することを目的としたものだった。</p> <p>This project is a research of novels and works of sociology written by the novelist and sociologist Francisco Ayala (1906-2009). In this project, I examined the development of Ayala's political and sociological ideas between the 1940s and the 1960s, and the representation of these ideas in five novels; Los usurpadores (1949), La cabeza del cordero (1949), Historia de macacos (1955), Muertes de perro (1958) and El fondo del vaso (1962).</p> <p>This research reveals clear connections between social problems in societies in crisis, expressed in Ayala's early sociological writing, and the themes portrayed by specific characters in his later novels. Ayala's earlier sociological works discuss various social problems that Spain and other countries experienced through the 20th century. Later, he presents these arguments as specific cases in the novels. Thus Ayala fuses sociological and literary arguments to clarify concrete social problems and to offer them to readers of his novels.</p>
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2016～2019 課題番号：16K02570 研究分野：文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_16K02570seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2016～2019
 課題番号：16K02570
 研究課題名（和文）20世紀スペインの小説と「社会の危機」：F.アヤラ作品における文学と社会学の交錯

研究課題名（英文）The 20th Century Spanish Novel and Social Crisis: Intersection between Literature and Sociology in F. Ayala's Works

研究代表者
 丸田 千花子 (MARUTA, Chikako)
 慶應義塾大学・経済学部（日吉）・准教授

研究者番号：00548414
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会学者であり文学者であるフランシスコ・アヤラ（1906 - 2009）の文学と社会学が融合する場としての小説について研究した。20世紀スペイン社会が経験した社会の危機を、アヤラは社会学の著作と小説で一貫して問い続けた。そのアヤラの1940年代から1960年代の著作を分析・考察した。結果、アヤラは社会の変革や危機についての考察を新聞、文芸誌や著書などで発表するだけでなく、抽象的観念的になりがちな社会学的な論考を、小説において具体的な日常生活のエピソードや人物に置換した。その試みは社会の危機をより広く一般読者に知らしめ、問題を提起し共有することを目的としたものだった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究にて、社会学の著作と小説との照応関係を研究した結果、先行研究で看過されてきた点や新たな知見を国内外に発信することができた。従前、アヤラ研究は文学作品を焦点とした研究が中心となっていたが、本研究により、アヤラ研究においては、文学作品だけではなく、彼の社会学の著作を含めた包括的な研究をする必要性を提起できた。またアヤラの著作とスペイン国内外のアヤラ研究を管理しているアヤラ財団に本研究成果を欧文で提供したことで各分野のアヤラ研究（文学、社会学、哲学、政治学など）の発展に少なからず貢献することができた。また研究過程で見出した文献情報の訂正なども財団に報告できた点からも国際的な貢献ができた。

研究成果の概要（英文）：This project is a research of novels and works of sociology written by the novelist and sociologist Francisco Ayala (1906-2009). In this project, I examined the development of Ayala's political and sociological ideas between the 1940s and the 1960s, and the representation of these ideas in five novels; Los usurpadores (1949), La cabeza del cordero (1949), Historia de macacos (1955), Muertes de perro (1958) and El fondo del vaso (1962). This research reveals clear connections between social problems in societies in crisis, expressed in Ayala's early sociological writing, and the themes portrayed by specific characters in his later novels. Ayala's earlier sociological works discuss various social problems that Spain and other countries experienced through the 20th century. Later, he presents these arguments as specific cases in the novels. Thus Ayala fuses sociological and literary arguments to clarify concrete social problems and to offer them to readers of his novels.

研究分野：文学

キーワード：スペイン現代文学 文学と社会学 スペイン内戦後文学 社会の危機 亡命知識人 フランシスコ・アヤラ 亡命文学

1. 研究開始当初の背景

20世紀スペインは、度重なる政体の変化(王政、共和政、独裁政、民主政)、スペイン内戦によるイデオロギー対立と階級闘争、社会秩序の崩壊、科学技術の進歩や拝金主義による価値観の転換がみられた。この社会の危機的状況を、作家たちは社会派リアリズム、実験小説やメタ小説の場で批判的に描写した。その中でフランシスコ・アヤラ(1906~2009)は、20世紀の歴史と文学の動向を体験した作家であり、社会の現実と問題をスペイン文学史の潮流に沿いながら、前衛主義小説、社会派リアリズム小説、実験小説で指摘し続けた。特に1940年から1960年代の小説5篇『篡奪者』(1949)、『仔羊の頭』(1949)、『サル物語』(1955)、『犬死』(1958)、『コップの底』(1962) - では、内戦や独裁政権という社会の危機のみならず、拝金主義を偏重する社会がかかえる問題を鋭く指摘した。また小説の創作と平行して、社会学者であるアヤラは、社会の危機について社会学の著作で論じた。アヤラは「社会学者と作家の2つの立場を切り離して執筆したことはない」、「大衆社会の危機における知識人の役割は、歴史的事実が示す永遠の課題を真摯に考えることだ」と述べているが、これらの発言は社会学の論考と小説の創作が密接に関係していることを示唆する。

従来のアヤラ研究は、個々の小説研究が主流だったが、近年はアヤラ財団が所蔵する書簡、資料、亡命先のアメリカ大陸での活動に関する研究が多い。一方で、小説と社会学の著作を含めたアヤラ作品の包括的な研究や、小説における社会学の論考の影響を指摘した研究は少ない。また小説と社会学の著作とを具体的かつ詳細に比較し、両者の照応関係を考察したものもない。

上記に述べた近年のアヤラ研究の学術的背景を踏まえ、2011年に『仔羊の頭』を共訳して以降、小説研究を行ってきた。1949年出版の『篡奪者』はスペイン史上の為政者による篡奪行為を糾弾しており、また『仔羊の頭』はスペイン内戦という社会の危機を前にした人間の理性の喪失と権力の行使を取り上げている。しかしアヤラの1940年代の社会学の著作を読むと、少なからずそこでの主張が小説に取り込まれていることが判明し、1950年代や1960年代の小説でも、社会の危機における知識人の役割、権力や自由の様相、人間の理性について示されているのではないかと考えた。アヤラの小説研究では、彼の社会学の論考の考察も加えた総合的な研究が不可欠だと考え、本研究の着想にいたった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会学者・文学者であるフランシスコ・アヤラの小説において、自身の社会学の論考から導き出された20世紀社会と危機についての理論が実践されていることを明確にすることである。アヤラは20世紀スペイン社会の危機を的確にとらえ、社会に関する理論的考察を小説の場で具現化しようと試みた。また独裁政権下の社会学界では十分に検証されなかった内戦後のスペイン社会の問題点を、アヤラは著書で明らかにした。そこで、本研究は、アヤラの小説と社会学の著作との詳細かつ具体的な関係を示すことにより、先行研究では指摘されてこなかった社会的視点からの小説の解釈を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

1940年から1960年代にかけて、アヤラが発表した5篇の小説と、社会学の著作で著した「社会の危機」に関する理論との照応関係について、次に述べる3つの研究手法で明らかにした。

(1)小説と社会学関連の著作の分析と考察を行った。研究対象作品は、1940年代から1960年代に出版された小説5篇と、小説のテーマに関係する社会学の著作である。アヤラ作品傾向としては、年代ごとに、その時代や社会事情について、特に高い関心を寄せて論じているテーマがあり、それを社会学の論考等で著した後に小説に反映しているため、小説の出版前後に発表された社会学の著作を精読していった。その際の留意点は、著書は初版を、新聞や学術誌などに発表された著作は発表された当時の原本の複写を用いることだった。その理由は、研究開始時から2018年ごろまでアヤラ財団では文献情報のデータベース化されていなかったこと、アヤラ全集の文献情報に誤植などがあったこと、またアヤラは新聞や学術誌で発表した著作を後年、著書として出版するとき内容の一部を編集したり、改訂版出版のときに収録内容の変更を行っていたことによる。執筆当時のアヤラの思想を正確に把握するために、著書の初版、また投稿記事の原本の複写を可能な限り収集した。投稿記事については、分野ごとに、また時系列に整理したリストを作成した。その際に発見した文献情報の誤植などはアヤラ財団に報告した。

(2)文献調査と資料収集を米国の大学図書館(コロンビア大学、プリンストン大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校)、ニューヨーク市立図書館、スペインの国立図書館、アンダルシア州立図書館、フランシスコ・アヤラ財団で行った。

米国の各図書館では、著作以外の一次文献(個人書簡、著書に関する手稿、新聞や雑誌の投稿記事)、アヤラ研究に関する二次文献、1940年から1960年代にかけて亡命した先の3カ国の政治社会や文化事情、スペインからの亡命知識人に関する資料など多岐にわたった。本研究は、文学、社会学、政治社会思想、哲学、翻訳学、教育学など、多くの分野を横断しているため、研究期間中に両国の図書館での資料収集は研究を遂行するためには不可欠だった。また研究成果をまとめる際にも米国ニューヨークへの海外出張で各種資料を参照しつつ、論文投稿の準備を進めた。特にカリフォルニア大学サンディエゴ校図書館内のサウスウオース・コレクションでは、非常に貴重な資料の閲覧ができた。他の亡命知識人とともにアヤラがアルゼンチンで創刊した雑誌『スペイン的思考』のほぼ全巻を閲覧、複写することができ、目次と記事内容のリストを作

成した。この雑誌の所蔵はアルゼンチン国立図書館、ならびに米国の大学図書館3館のみであるため、亡命知識人の研究でも言及が少ない雑誌である。研究の必要性はあるが、今回は時間的制約があったため今後、研究することとした。

スペインのアヤラ財団では、未刊行の手稿の収集を行うと同時に、大学図書館や国立図書館でアクセスが難しかったアヤラの全著作の初版本を確認した。これは研究の進展に大いに役立った。

スペイン・マドリードのスペイン国立図書館では研究対象の作品と二次文献の収集を行った。特に米国内図書館で所蔵が少ないスペイン社会学関連の書籍の収集を行った。またアンダルシア州立図書館では、グラナダ出身の20世紀前半に活躍した作家に関連する資料を閲覧した。

(3)学会等で、スペイン現代文学の最新の研究動向を把握し、研究者との意見交換を行った。現代スペイン文学に関する最新の研究動向を踏まえながら研究を発展させるため、国外の学術集會に積極的に参加した。それらの場で研究成果を口頭発表すると同時に、研究者と交流し、情報や意見の交換を行った。特に2016年に招待講演を行ったアヤラ財団で他の分野のアヤラ研究者と交流ができたこと、またアヤラ研究者でありアヤラ夫人であるキャロリン・リッチモンド名誉教授(NY市立大学)、ウィリアム・シェルツァー名誉教授(NY市立大学)らをはじめとするアメリカとスペイン在住の研究者と知り合うことができたのは、研究の発展の助けとなる。

4. 研究成果

本研究期間では、各年度の研究計画をほぼ達成し、さらに招待講演などにより、研究がさらに発展して当初予定していなかった新しいアプローチでアヤラの商品研究を行うことができた。以下が本研究期間の研究成果である。

(1)1940年代前半に出版した社会学の著作、『自由主義の問題』(1941)と『自由をめぐる歴史』(1943)は、欧米における自由主義と社会の権力構造の変遷を歴史的に検証している。特にブルジョワ層の出現が、社会の変革に大きな影響を及ぼしたことや、社会の発展の変遷は社会階級間の権力闘争の歴史によるものであることを指摘している。特に両書では、ブルジョワ層の台頭が封建社会の崩壊と自由主義社会の誕生に寄与している点が強調されており、これらの著作で示した社会の変革と社会階級間の権力闘争を、小説の場で具体的に表したのが『篡奪者』(1949)と『仔羊の頭』(1949)であることがわかった。中世から17世紀までのスペイン史のエピソードを題材とした『篡奪者』は、王権を中心とした既存の権力者とブルジョワ層を中心とした新勢力の間の権力闘争を描いている。一方、『仔羊の頭』では、スペイン内戦中、地域、家族などを単位とする社会グループの間でみられた対立構造、社会階級間の争いを描いている。

これら2つの社会学の論考に追加する形で、『社会における理性』(1944)で問題提起した大衆社会における知識人の役割についての考察が、『犬死』(1958)で示されている。作中人物の設定や小説の社会背景に、この考察結果が具体的に提示され、1940年代から1950年代にかけて社会学の著作で提示された論点が、これら3篇の小説の創作に生かされていることが明らかになった。

(2)アヤラの翻訳論については当初の研究計画に含まれていなかったが、アヤラ財団からの招待講演をきっかけに「翻訳理論」(1946-47)の分析を行った。1940年代に独仏伊葡語からスペイン語に翻訳した経験をもつアヤラは、自身の翻訳体験をもとに、19世紀のフレデリック・シュライアーマッハーの翻訳論への批判的検証を行いつつ、翻訳に対する基本姿勢を示した。アヤラは翻訳する際に、翻訳される書のジャンル、思想または文学によって異なる翻訳手法を提言する。特に文学作品の翻訳にあたっては、言語と文化の2つの側面を考慮に入れながら、翻訳すべきだと論じる。20世紀前半のスペインにおいて、知識人や文学者による翻訳論は決して多いとはいえない。同時代では哲学者のホセ・オルテガ・イ・ガセーによる翻訳論『翻訳の貧弱さとすばらしさ』(1936)が良く知られている。したがってこの時期におけるアヤラの論考は貴重である。アヤラはこれらを参照しつつも、翻訳論に新たな視点を加えている。この論考では、文学的視点からだけでなく、社会学的視点から1940年代の社会における翻訳業や翻訳家の扱いを検証し、翻訳という生業が正当な評価を受けていないと批判する。この考察は、20世紀後半に発展した翻訳学の理論形成、また21世紀に入って登場した翻訳社会学の議論にも通じるものである。

(3)1950年代の小説『サルのお話』(1955)と『犬死』に共通するテーマについて考察した。

『サルのお話』と『犬死』が、アヤラが著した哲学的思想の3点の短い論考と密接に関係している点を明らかにした。この3つの論考は1949年から1950年にかけて執筆されたものとされ、近年、プリンストン大学図書館から発見された手稿であり、2015年にアヤラ財団によって出版された。この中の論考「自己の身体と向き合う私」は、人間の条件について哲学的人間学の観点から論じている。哲学者ハビエル・サン・マルティンによると、この著作はドイツのマックス・シェラーやアルゼンチンのフランシスコ・ロメロらの哲学書に感化されて執筆されたという。彼らの著作とアヤラの著作とを比較すると、確かにアヤラは彼らの考えを基盤として、身体と精神についての議論を展開している。しかし、そこで示した人間の条件についての考えは、すでに本研究で取り上げている『篡奪者』、『仔羊の頭』、『サルのお話』や『犬死』で断片的にみられる。このことから、この「自己の身体と向き合う私」は、小説の創作を通じて、アヤラが独自に議論を展開した結果の著作ではないかと推察する。なかでも『サルのお話』と『犬死』の作中人物を動物ないしは動物集団に例えている点は、この論考と深く関係があると考えられる。この哲学的

な論考と小説の関係については、従前の先行研究では指摘されていない点であり、本研究で新たな解釈を提示できた。

この2篇の小説の分析過程でさらに確認できたことは、これらの小説では、ヨーロッパ文学や美術にみられる伝統的な動物シンボルを用いて作中人物の行動を動物化し、大衆と彼らに迎合する知識人や支配者らエリート層の道徳的退廃を批判している点である。知識人やエリート層の道徳的退廃については、(1)で述べたように『社会における理性』での論考が基盤となっているが、『犬死』だけではなく『サル物語』においてもこの問題を取り上げていることが明らかになり、大衆社会における知識人の役割に対して、アヤラが引き続き深い関心を寄せていることがわかった。

(4) 1940年代と1950年代のアヤラの小説の舞台がスペインからスペイン以外の国や地域へと変わり、取り上げるテーマもスペインに特化したものから、普遍的なものへと展開していく。これを読み解く鍵となるのがエッセイ「誰のために我々は執筆するのか」(1949)である。この著作は、第二次世界大戦後のスペインの亡命知識人の状況を指摘したものとして、亡命知識人の研究論文等では頻りに引用される重要なものである。このエッセイは、第二次世界大戦後の国際社会の変化に順応できない亡命知識人の現状についての考察である。第二次世界大戦後もフランコ独裁政権は存続し、独裁政権の崩壊を期待していた亡命知識人は内戦後に抱いていた思考を転換できず、郷愁を抱きながらスペイン内戦やその原因について、また内戦後の社会や自分たちの苦境を著作に著してきた。しかしそうしたスペインの問題に特化した著作はスペインでは検閲により出版が困難であり、また読者が限定される危険があるとアヤラは指摘する。そこでアヤラは自分たち知識人の使命はより広い視野をもって、第二次世界大戦後の世界が抱える問題にスペインの問題を組み入れた著作を発表して、新たな読者を獲得すべきだ主張する。アヤラの小説の傾向を検証すると、1949年の『篡奪者』、『仔羊の頭』と、それ以降の小説の舞台やテーマに変化がみられ、アヤラが自らの主張を小説で実践していることが明らかとなった。

(5) 前述の(1)や(3)でも指摘した通り、『犬死』では、知識人の道徳的退廃が描かれているが、大衆社会における大学教育の問題点も作中人物の問題として描かれている。アヤラは小説が出版される前年に『教育の危機』(1957)を上梓している。これは主に亡命先のアルゼンチンとアメリカ合衆国における高等教育の問題点を指摘している内容だが、この論考はオルテガ・イ・ガセーの『大学の使命』(1930)さらに友人でメキシコに亡命した社会学者ホセ・メディーナ・エチャパリアの『アカデミアと社会』(1952)の継承しつつ、アヤラ独自の視点と自身の経験を加えたものである。この『教育の危機』では、オルテガらの議論をより具体的で明確な事例を用いて示している。この議論を踏まえて、『犬死』では大衆社会においてエリート層出身ではない市民を大学が適切に教育できなかった事例を具体的に示すために、横暴で無秩序な言動をおこなう人物を登場させており、大学教育についての論考を具体的な形で表わしていることが明らかになった。

(6) 1960年代の小説『コップの底』(1962)は、アヤラのジャーナリズム論を反映している。小説の第2部は新聞記事の切り抜きから構成されており、これらの記事が小説で起こる事件の真相を明らかにする。新聞記事を用いた手法の効果と意義を検証するため、1940年代から1980年代までにアヤラが発表したジャーナリズムや世論に関する著作を分析した。分析した主な著作は「世論」(1941)、「新聞について」(1944)、『新聞のレトリック』(1984)である。結果、アヤラは新聞をはじめとするジャーナリズムが良くも悪くも世論形成に重要な役割をもち、民主主義のシンボルでもあると一貫して社会学の著作で論じ続けていることがわかった。そしてその知見を『コップの底』の創作に反映させ、ジャーナリズムの有用性と限界を小説という場で提示したことが明確になった。

(7) 以上の研究成果を国際学会、招待講演または英語論文として発表した。従来、アヤラ研究やスペインの亡命知識人の研究で取り上げられなかった点を本研究課題で指摘することができたことは大きな成果である。また本研究の成果は、英語やスペイン語で行い、オープンアクセスの紀要に英語論文で発表した。国内外のスペイン文学や他分野の研究者にも発信できたことは意義があると思われる。

(8) しかし一方で課題も残った。まず、3.(2). で述べたように、カリフォルニア大学サンディエゴ校図書館内のサウスウオース・コレクションで収集したアルゼンチンで発行された『スペイン的思想』の分析である。この雑誌は、アヤラのほか、スペイン人のジャーナリストや学者によって創刊されており、アルゼンチンにおける亡命スペイン人のコミュニティや思想を知る手がかりとなる。その研究を進めたいと考えたが、時間的余裕がなく、今後の課題となった。

次に研究実施計画に従って1960年代の2つの著作『環大西洋岸の2つの世界』(1963)と『今日のスペイン』(1965)の精読を行った。これらの著作でアヤラは母国および亡命先の社会の現状と問題点を指摘し、アメリカ大陸に亡命後の20年間で得た知見を通して、イスパニスモ(スペイン語圏文化)について論じている。しかしながら最終年度ではこれらの著作と小説との関係性について考察し、研究成果を発表するまでに至らなかったため、今後、研究をさらに進めたい。

また学会や招待講演で発表した研究成果の中にはまだ論文として発表していないものもあり、今後はこれらを欧文論文として投稿すべく準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Chikako MARUTA	4. 巻 51
2. 論文標題 The Rhetoric of Newspapers in Francisco Ayala's EL fondo del vaso	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 89-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Chikako MARUTA	4. 巻 34
2. 論文標題 The Problems of Higher-Education in Spanish Intellectuals' Writings and in Francisco Ayala's Novel Muertes de perro	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日吉紀要 人文科学	6. 最初と最後の頁 213-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Chikako MARUTA	4. 巻 50
2. 論文標題 A New Readership for the Exiled Writers: Evolution of Francisco Ayala's Post-War Novels	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 175 - 188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Chikako MARUTA
2. 発表標題 The Theatrical Arts of the East and the West and Displacement in Auto de los despatriados
3. 学会等名 The 2018 Annual Meeting of the American Comparative Literature Association（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chikako MARUTA
2. 発表標題 Francisco Ayala and Literature in Exile
3. 学会等名 University of Alabama, Department of Modern Languages & Classics, Department of English, The Blount Scholars Program (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chikako MARUTA
2. 発表標題 Satirical Beasts as a Tool of Social Manifestation in Francisco Ayala's Novels
3. 学会等名 The 59th Annual Convention of the Midwest Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Chikako MARUTA
2. 発表標題 Francisco Ayala y la teoria de traduccion en Argentina de los anos 1940
3. 学会等名 The 70th Annual Conference of KFLC: The Languages, Literature and Cultures Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Chikako MARUTA
2. 発表標題 Socio-political Insights in Francisco Ayala's Novels of the 1940s and 1950s
3. 学会等名 48th Annual Conference of the Northeast Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Chikako MARUTA
2. 発表標題 Teoria y practica de la traduccion japonesa de La cabeza del cordero
3. 学会等名 Conversaciones en la Fundacion V: Contextos culturales y literarios de Francisco Ayala (招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----